

令和 8 年度農作物有害動植物発生予察情報 発生予報第 7 号（10 月）

令和 8 年 9 月 30 日
山形県病害虫防除所

〔概 要〕

園芸作物：りんごの黒星病・褐斑病、日本なしの黒星病は、翌年の伝染源密度を低減するため、収穫終了後に薬剤散布を行ってください。また、前述の病害に加えておうとうの褐色せん孔病は、落葉を集め適切に処分する等、耕種的対策を組み合わせ総合的に防除を実施してください。

秋冬ねぎの葉枯病・黒斑病の発生量はやや多い予想です。散布間隔があきすぎないように防除を行ってください。**シロイチモジヨトウの発生量はやや多い予想です。**被害の拡大が見られる場合は異なる系統の薬剤で防除を実施してください。

予報内容一覧

作 物 名	病 害 虫 名	発 生 量
り ん ご	黒星病・褐斑病	—
	炭そ病	—
も も	せん孔細菌病	—
日 本 な し	黒星病	—
お う と う	褐色せん孔病	—
果樹共通害虫	コスカシバ（もも・おうとう）	平年並
秋 冬 ね ぎ	葉枯病・黒斑病	やや多い
	さび病	—
	ネギアザミウマ・ネギハモグリバエ	平年並
	シロイチモジヨトウ	やや多い
野菜・花き共通害虫	オオタバコガ	平年並
	ハスモンヨトウ	—

山形県病害虫防除所	本 所	TEL 023-644-4241	FAX 023-644-4746
	庄内支所	TEL 0235-78-3115	FAX 0235-64-2382
山形県病害虫防除所トップページ	https://agrin.jp/theme/byogaichubojosho/index.html		
農作物有害動植物発生予察情報	https://agrin.jp/theme/safe_products/yosatsu/index.html		

1. 合成ピレスロイド剤等を使用する場合は、市町村農作物有害動植物防除協議会等で定めた地区に限って使用し、蚕・魚類に対する被害を防止する。
2. 耐性菌・抵抗性害虫の出現を防止するため、薬剤の選択及び使用回数に留意する。
3. **品種ごとの収穫時期を考慮し、使用時期（収穫前使用日数等）を厳守する。**
4. **農薬の使用に当たっては、登録内容（農薬使用基準）を遵守するとともに、隣接地や周辺作物へ飛散しないよう十分留意する。また、使用後は防除日誌の記帳に努める。**
5. 農薬の空容器や空袋等の処理は、廃棄物処理業者に処理を委託する等により適切に行う。

予報根拠中の記号 (+)：発生量を多くする要因 (－)：発生量を少なくする要因

I 園芸作物

1. りんご

(1) 黒星病・褐斑病

翌年の伝染源密度の低減を図るため、以下の対策を徹底する。

ア. 収穫終了後に薬剤散布を必ず行う。

イ. 落葉した発病葉は翌年の一次伝染源となるため、収穫終了後から翌春の展葉期までに落葉を集め適切に処分する等、耕種的対策を行う。

ウ. 枝葉の混み合った園では日当たりや風通しが悪く、樹冠内部へ薬液がかかりにくくなる。せん定に当たっては、薬液の到達性を考慮し実施するとともに、過度のせん定とならないよう注意する。

(2) 炭そ病

9月29日現在、一部で発病果が確認されている。発病果は二次伝染源となるので、見つけ次第摘み取り適切に処分する。

2. もも

(1) せん孔細菌病

翌年の伝染源密度の低減を図るため、以下の対策を徹底する。

ア. 落葉期までに無機銅剤を前回散布から2週間おきに1～2回散布する。なお、台風等により早期に落葉すると、落葉部位からの感染が多くなるため、台風の通過前や降雨前に薬剤防除を徹底する。

イ. 薬剤散布に当たっては、枝先まで薬液が十分にかかるようていねいに行う。

3. 日本なし

(1) 黒星病

翌年の伝染源となるりん片への感染を防止するため、以下の対策を徹底する。

- ア. 収穫終了後、芽りん片が露出する頃（10月上旬頃）から1～2回薬剤散布を行う。なお、発生が多い園では2回実施する。
- イ. 薬剤散布に当たっては、薬液が樹全体にかかるようにいねいに行う。また、スピードスプレーヤで散布する場合は、走行速度や散布経路に注意し、散布ムラを防ぐ。
- ウ. 落葉した発病葉は翌年の一次伝染源となるため、落葉を集め適切に処分する。

4. おうとう

(1) 褐色せん孔病

9月29日現在の発生量はやや多い。翌年の伝染源密度の低減を図るため、以下の対策を徹底する。

- ア. 落葉後に薬剤散布を行う。なお、薬剤の選定に当たっては「山形県病害虫防除基準」を参照する。
- イ. 落葉した発病葉は翌年の一次伝染源となるため、落葉を集め適切に処分する等、耕種的対策を行う。

5. 果樹共通害虫

病 害 虫 名	対 象 作 物 名	予 報 内 容
		発 生 量
(1) コスカシバ	もも・おうとう	平年並

1) 予報の根拠

9月29日現在の発生量は平年並である。

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 枝幹部の食入痕からは、虫糞の混じったヤニが出ているので、よく観察し、幼虫を見つけ次第捕殺する。また、細かな虫糞の出ている食入痕周辺は、木槌等で軽くたたいて樹皮下の幼虫を圧殺する。
- イ. 若齢幼虫は樹皮下の浅い部分に食入するため、落葉後直ちに枝幹部に薬液が十分にかかるように薬剤散布を行う。
- ウ. 枝幹の樹皮が裂けている場合や樹勢が低下している樹は、特に被害を受けやすいので防除を徹底する。
- エ. 若木や幼木は、こぶ状に盛り上がった接木部が被害を受けやすいので、この部位にも薬液が十分にかかるようにいねいに散布する。

6. 秋冬ねぎ

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(1) 葉枯病・黒斑病	やや多い

1) 予報の根拠

- ア. 9月29日現在の発生量はやや多い。(＋)
- イ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は多いと予報されている。(＋)

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 降雨が続く場合には、薬剤の散布間隔があきすぎないように雨の合間を見て防除を行い、散布予定日に降雨が予想される場合は前倒しして降雨前に散布を行う。
- イ. 株全体に薬液を付着させるため、十分量の薬液をていねいに散布する。
- ウ. 葉枯病は、新葉に発生する黄色斑紋病斑の原因となるので、例年発生が多い圃場では特に防除を徹底する。また、一部の品種（夏扇パワー等）で発生しやすいため注意する。なお、収穫が遅れると発生しやすくなるため、適期収穫に努める。

(2) さび病

9月29日現在、発生は確認されていないが、降雨が続くと発生が多くなるため、以下の対策を実施する。

- ア. 肥切れで発病が多くなるので、止め土前に追肥を行い、肥切れを防ぐ。
- イ. 潜伏期間が長いため、発生前から防除を行う。
- ウ. 降雨が続く場合には、薬剤の散布間隔があきすぎないように雨の合間を見て防除を行い、散布予定日に降雨が予想される場合は前倒しして散布を行う。
- エ. 一部の品種（関羽一本太等）では発生しやすいため注意する。
- オ. 発生が見られた場合は、圃場内で広く感染している恐れがあるため、速やかに薬剤散布を行う。

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(3) ネギアザミウマ・ネギハモグリバエ	平年並

1) 予報の根拠

- ア. 9月29日現在の発生量は平年並である。
- イ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は多いと予報されている。

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 圃場をよく観察し、中心葉への加害が目立つ場合は防除を徹底する。
- イ. 株全体に薬液を付着させるため、十分量の薬液をていねいに散布する。
- ウ. 薬剤抵抗性出現を防止するため、作用性の異なる薬剤グループで輪用散布を行う。

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(4) シロイチモジヨトウ	やや多い

1) 予報の根拠

ア. フェロモントラップにおける 9 月 5 半旬までの総誘殺数は、県予察圃場（寒河江市）で平年並、地区予察圃場（酒田市）でやや多く 9 月 5 半旬に誘殺数が急増している。（+）

イ. 9 月後半の巡回調査の結果、中齢～老齢幼虫による葉の食害が確認されている。（+）

ウ. 向こう 1 か月の天候は、気温が高く、降水量は多いと予報されている。

2) 防除上注意すべき事項

ア. 圃場をよく見回り早期発見に努め、卵塊や被害葉、幼虫は見つけ次第取り除き適切に処分する。

イ. 幼虫の齢期が進むにつれ防除効果が低下するため、若齢幼虫時に速やかに薬剤を散布する。なお、株全体に薬液を付着させるため、十分量の薬液をていねいに散布する。

ウ. 薬剤散布後も圃場をよく見回り、被害の拡大が見られる場合には、作用性の異なるグループの薬剤を散布する。

エ. 台風や低気圧の通過に伴い多飛来することがあるので、通過後に圃場をよく見回るとともに、発生予察情報等により発生動向の把握に努める。

7. 野菜・花き共通害虫

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(1) オオタバコガ	平年並

1) 予報の根拠

ア. フェロモントラップにおける9月5半旬までの総誘殺数は、県予察圃場（寒河江市）でやや多く、県予察圃場（山形市）および地区予察圃場（酒田市）で平年並である。

イ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は多いと予報されている。

2) 防除上注意すべき事項

ア. 果実、花蕾、新芽等の内部に潜り込んで食害するため、圃場をよく見回り、早期発見に努めるとともに、被害部位は内部に幼虫が生息している場合があるので適切に処分する。

イ. 幼虫の寄生や被害が見られる場合は、直ちに薬剤散布を行う。なお、株全体に薬液を付着させるため、生育に応じた十分量の薬液をていねいに散布する。

ウ. 台風や低気圧の通過に伴い多飛来することがあるので、通過後に圃場をよく見回るとともに、発生予察情報等により発生動向の把握に努める。

(2) ハスモンヨトウ

9月29日現在、発生はやや少ないが、台風や低気圧の通過に伴い多飛来することがあるので、以下の対策を実施する。

ア. 圃場をよく見回り早期発見に努め、卵塊や被害葉、幼虫は見つけ次第取り除き適切に処分する。

イ. 薬剤防除を行う場合は、幼虫の齢期が進むにつれ防除効果が低下するため、若齢幼虫時に散布する。

ウ. 薬剤抵抗性の出現を防止するため、作用性の異なるグループの薬剤で輪用散布を行う。

[発生予察情報で使用する時期、量の表現の基準]

1. 時期

平 年 並	平年値（過去 10 か年の平均）を中心として前後 2 日以内
やや 早 い	平年値より 3～5 日早い
ややおそい	平年値より 3～5 日おそい
早 い	平年値より 6 日以上早い
お そ い	平年値より 6 日以上おそい

2. 量（発生量、発生面積及び被害量等）

過去 10 年間の値を、発生が多い順に下図のように並べ、本年の値との比較により求めます。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
←多い→	← やや多い →	← 平 年 並 →					← やや少ない →	←少ない→	

東北地方 1 か月予報 (09/26～10/25)		
2026年09月24日14時30分 仙台管区气象台 発表		
特に注意を要する事項	東北南部では、期間のはじめも降水量が多く、日照時間の少ない状態が続く見込みです。	
向こう 1 か月 09/26～10/25	天候	天気は数日の周期で変わるでしょう。
	気温	平均気温は、高い確率 60% です。
1 週目 09/26～10/02	気温	1 週目は、高い確率 70% です。
2 週目 10/03～10/09	気温	2 週目は、平年並の確率 50% です。
3～4 週目 10/10～10/23	気温	3～4 週目は、高い確率 50% です。

気温、降水量、日照時間の各階級の確率 (%)			
気温	東北地方	向こう 1 か月 09/26～10/25	10 30 60
		1 週目 09/26～10/02	10 20 70
		2 週目 10/03～10/09	30 50 20
		3～4 週目 10/10～10/23	20 30 50
降水量	東北地方	向こう 1 か月 09/26～10/25	30 30 40
日照時間	東北日本海側	向こう 1 か月 09/26～10/25	30 40 30
	東北太平洋側	向こう 1 か月 09/26～10/25	30 30 40

■ 低い(少ない) ■ 平年並 ■ 高い(多い)